

郷土室だより

『江戸・東京の川』中央区の川(二)

前号では、江戸から明治初期の区内にあった河川を再確認し、震災前の東京市内の河川について概観してみました。掲載した「中央区にあった川」の図を見た利用者から「あらためて区内に水路が多かったことを知りました」との声もいただきました。

さて、今号では水の都『江戸・東京の河川や水路の両側に成立していた多くの河岸地について、具体的に考察してみます。

◇江戸湊と河岸

江戸以来、東京の中心部『現在の中央区』の範囲及び江東地区の水路の大部分は、運河としての機能と役割を果たしてきました。水路の両側には河岸地が形成され、鉄道・自動車などの陸上交通機関が登場するまで、すべての物資は運河と河岸地を経て、江戸・東京の経済活動を支えてきたといっても過言ではありません。そして、これらの運河や河岸地は機能を発揮できるように、絶えず

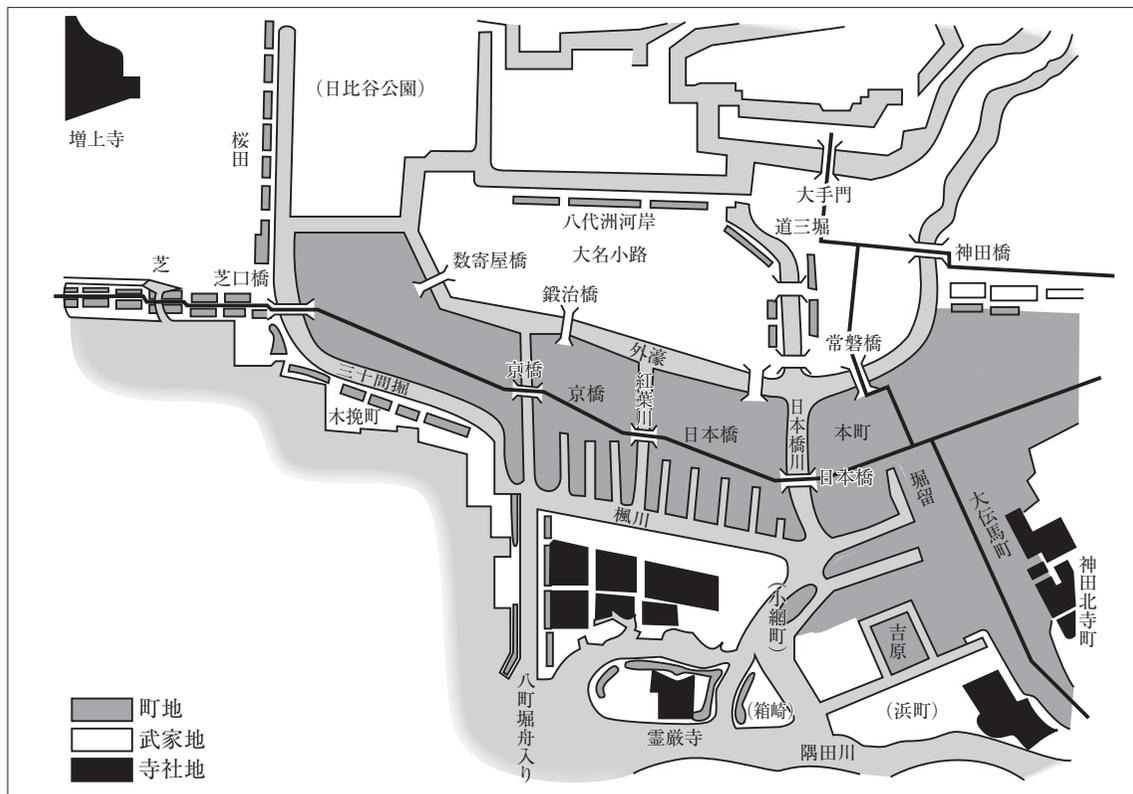


図1 『武州豊嶋郡江戸庄図』(寛永9年)より作成

改修と整備が行われてきました。

江戸の市街地は約七割以上が武家地で、寺社地と町地が残りの半分ずつを占めていました。水辺についても大量輸送に好都合な江戸湊^Ⅱ海岸沿いや運河の大部分は、幕府や諸大名によって独占されており、町人が利用できた河岸は市街地に入り込んだ堀や運河、濠などの水辺の一部でした。

また隅田川左岸以東(江東地区)につらなる縦横の運河の沿岸にも、多くの河岸が成立していま

した。図2に示したとおり、江戸期には限られた水辺空間にも、さまざまな種類の河岸が成立し、いまだは想像もできないほど多くの河岸があったのです。

こうした河岸地は、江戸以来、俗称で呼ばれていましたが、明治九(一八七六)年から一三(一八八〇)年頃にかけて、町名の起立や改称に合わせて正式な名称がつけられました。当時の日本橋区で二七カ所、京橋区では二六カ所で、現在の中央区内には五三カ所もあったことになりました。

◇江戸湊

江戸は天下の三津(京都伏見・大坂と江戸の三ヶ所)と呼ばれていたように、全体的には津であり、隅田川河口とその右岸から芝浦につづく「江戸前」に面した河岸が、江戸湊と呼ばれています。

*津とは、船舶の碇泊する所。ふなつき・人の集まる所を意味します。

天正一八(一五九〇)年に江戸入りした家康は、さっそく本拠地の江戸「湊」の整備を開始しました。將軍の代にして家康・秀忠・家光・家綱の四代、七〇年にもおよび大江戸建設の時代をむかえ、湊と市街地は、徳川氏の実力に比例して拡大しました。それは將軍の居城とそれを支える都市が必要とする、大量の物資の水上輸送手段を確保するためでした。

*湊は、港の意味する「船つきば」とは違い、「水辺にあつまる」という状況を意味します。

海に川があつまり、そこに舟があつまり、人と物が集まる場所を指しています。

多くは河口に成立して発達しました。

江戸城の建設は、全国の大名を動員する天下普請として行われました。全国から築城用の資材や物資が水上輸送を利用して、江戸湊に集中したわけでした。

◇初期の河岸

湊の具体的な施設である河岸と物揚場について簡単に説明します。江戸の場合、「河岸」とは川または海に面した町人地に付属する荷揚場をいいました。

河岸の文字通りの意味は川の沿岸のこと、ここであるという河岸とは川や海に面した町屋敷に付属する荷揚場所をさします。たんに荷物が陸揚げされる物流センター的なものではなく、集まった荷物^Ⅱ品物が商人たちと相対で取り引きされる、市場のような役割も果たしていました。

町が形成され発展するにともなう、水路に沿って取り扱う品物や業種ごとに河岸が成立しました。一方、武家地の場合には「物揚

場」と呼ばれて、河岸とは区別し

て呼ばれました。家康が江戸入りした当時の江戸湊は、平川河口(現在の大手町付近)を中心とした日比谷入江沿岸

が、その範囲だったといわれています。河岸も日比谷入江沿岸の八代洲^{ヤヤ}河岸と江戸前島の東岸に限られていたようで、入江の西側沿岸には日比谷村や桜田村、東側に老月村がありました。

江戸最初の河岸は、臨海部の「湊」からはじまります。家康が江戸入りした天正一八(一五九〇)年当時の江戸城は、日比谷入江に面した城でした。その後新たな江戸城は、日比谷入江沿岸の河岸を工事起点にして築かれました。

現在も残る和田倉門の呼び方の「ワタ」は海の意味で、海から陸揚げされた物資の倉庫を指した名称です。ここから日比谷までの入江の東岸(当時の海岸線)は、八代洲^{ヤヤ}海岸と呼ばれました。

*八代洲^{ヤヤ}河岸・ヤン・ヨーステンの名にちなむ河岸で、江戸初期の中心的な河岸でした。また江戸城建設工事を支えると

